

言語形式と語用論的解釈*

武内道子

I

一つのメッセージを伝達するのに複数の方法があることは自明である。伝達を成功に導くために、何をというより、どう言うべきかを決定することの方がより重要であると思われる。一つの思考をどのように言うか (how to say) ということにこだわるのは、その決定が伝達上の効果と結びつくからである。しかし、その効果とは単なる美的、修飾的なものではなく、認知上の効果である。この効果を得ようとして、伝達者(話し手・書き手)は自分の利用できる範囲で、言語形式を選択する。この考えの根底にあるのは、人は単に貯えた思考(命題)を伝搬すればよしとするのではないということである。われわれは一つの思考をいろいろの方法で表示することを楽しみ、異なった態度でこれを包もうとする。

関連性理論の枠組みでは、聞き手はその発話の命題を単に同定すればよいというのではなく、それが関連性を有する (to be relevant) のかどうかを確立しなければならない。聞き手のもつ文脈 (context) からの情報と、その呼び出し可能性 (accessibility) に対する話し手の見積りの下で、どれだけを明示的に述べ、どれだけを非明示的に残すのかを話し手は決定し、かつ、それによってどのような形式で表現するのかを、決定しなければならないということである。本論文は、話し手が伝達という目的に沿って言語形式をどう選択しうるのかという観点から、言語形式とその解釈の間の関係を論じるものである。さらに、この選択の結果、明示性の程度によって言語形式のバリエーションがもたらされることを

*本稿をまとめるに当たって、神奈川大学「言語学サロン」の国広哲弥氏、鈴木広子氏、井谷玲子氏とのディスカッションを通して、コメントやアイデアを大いに得た。しかし間違い、思い違いがあればすべて筆者のものである。

考察する。

第一に、聞き手の命題同定の際、話し手がどの程度聞き手を誘導するのか、つまり、その発話の明示性の程度を観察する。第二に、表出された命題と関わる際、聞き手に課せられる制約という観点から言語形式と明示性の関係を議論する。後者では、二種の制約が区別される。純粹に非言語的（つまり語用論的）要素による制約と、言語形式による制約である。

本論に入る前に、何を伝達するのかという問いに答えるべき理論としての関連性理論の概念を述べる。

Sperber & Wilson (1986) は発話解釈は情報処理に関する人間の認知上の原則に基づいて説明されるべきものと主張した。この原則の基本的考えは、情報を処理する際、人間は自分の世界についての表示の改善——拡大したり、訂正したり、却下したりする——をめざすが、同時にこれを最小の努力で処理することをめざすということである。あらゆる情報が改善につながるわけではないことは明らかである。たとえば、既に保持している情報をもらっても、聞き手の世界表示は改善されたとはいえないであろう。また、保持している情報と全く関係のないものを提示されても同様であろう。なぜなら、聞き手は常に新しい情報を既存の情報と関連付け、一体化しようとするからである。この作業こそが、自分にとって関連性を有する (relevant) 情報の復元をめざすことなのである。さらに、聞き手は世界について少しでも多くの情報を得さえすれば、つまり情報が多ければ多いほどよいと思っているわけでもなかろう。既にもっている信念や仮定との関係においてよりよい証拠を獲得することをめざすものである。

新しい情報 (のもつ命題) の効果がどのくらいのものかを算定する際、駆使されるものが推論 (inference) と呼ばれる。一連の文脈情報 (文脈仮定) は前提条件 (premise) として発話の内容と結びついて、発話解釈に中心的働きをする。世界についての知識、信念などの情報の働き方には強弱があり、結論を導出する際に使われる前提条件の強弱に応じて、推論によるその結論にも強弱が生じる。

聞き手の既存の情報に新しい情報が加わる時、推論機構は三方向に働く。すなわち、

- 1) 新・既存命題間の不一致のテストとして働く。故に、聞き手は既存の想定を破棄する決定をすることになる。
 - 2) 既存の想定が新参の情報によって確認されたり、正当化される程度をはかる。
 - 3) 新命題の前提条件は聞き手の既存の世界観から引き出されるから、いわゆる文脈含意 (contextual implication) を同定する。すなわち、既存の世界観に加えていくことを可能にする働きをする。
- いずれの場合も聞き手のもつ情報 (文脈) と組み合わせられて、文脈効果 (contextual effect) が得られることになる。

聞き手の世界についての表示にもたらす変化が大きいほど、その情報命題の有する関連性は大きくなるということは自明であろう。一方、情報処理には労力と時間が要求される。つまりコストがかかる。新情報処理のコストが大きいほど、処理をしている人にとっての関連性は減ずる。具体的には、発話のもつ言語的複雑さによるコストと、文脈仮定を呼び出す際のコストがある。

聞き手が関連性をもとめているからこそ、話し手は自分の発話をより少ないコストで処理できるよう、同時にできるだけ容易に理解してもらえよう努める。逆にいうと、話し手が適切な文脈効果を、最小の処理労力で与えたという想定の上で、すなわち、最善の関連性を求めているという仮定に立って、聞き手はあらゆる発話を解釈するのである。これが関連性の原理 (principle of relevance) である。この原理によれば、伝達の成功は話し手側の責任ということになろう。話し手は、1) 聞き手に正しい命題を復元させることを可能にする文脈を、聞き手が即座に呼び出せると信じ、かつ、2) この文脈で文脈効果が獲得されると信じる根拠を有してこそ、伝達が成功することになるのである。

II

ここでは聞き手の命題同定の際生じる言語形式について考察する。聞き手の発話解釈の第一歩は命題の同定である。発話の真理値は、まず使われている語や句とその配列を含む統語的特質に基づくことは言うまでもない。しかし、同じ語句も場面が変われば異なった意味になり、代名

詞その他の指示表現の指示する対象はやはり場面とともに変わる。また、発話は不完全な省略された表現を多く含み、補われるべきものは文脈によって異なる。(1)は、「小学校」の建物としての意味と制度としての意味のいずれかによって、二つの解釈が可能であるが、(2)への応答として提示されたら、聞き手は前者の解釈を即座に選ぶ(西山(1992))。

(1) 小学校がつぶれました。

(2) この前の台風でこの町ではどんな被害がありましたか。

また、(3)の「こちら」は話し手のいる場所を示すが、(4)の「こちら」は聞き手のいる場所を指すので、(3)と(4)の真理値は全く異なる。

(3) こちらは鈴木さんです。

(4) こちらは鈴木さんですか。

さらに、(5)は(6)のように肉付けされたものとして解釈されるかもしれない。

(5) 今晚、勝てるかな。

(6) 今日の夜行われるサッカーの試合に、日本のサッカーチームは勝つことができるであろうか。

これらの例が示唆することは、自然言語の文は命題を表出しているとはいえないのであって、命題に対する言語的青写真(linguistic blueprint)(Blakemore(1992), 43)を提供する、ということである。すなわち、聞き手がその場での文脈情報を選び、それを使用することによって、この青写真を完全な命題、つまり、話し手の伝達しようとした思考へと同定していくのである。Sperber & Wilsonによれば、(1)と(2)の過程は一義化(disambiguation)、(3)と(4)の「こちら」の同定は指示付与(reference assignment)、(5)から(6)への過程は富化(enrichment)と呼ばれるもので、文法的に制約を課していく過程である²⁾。

一つの思考(命題)を伝えるために、話し手は発話の形式について選択をする。とりわけ、自分の発話を解釈する際、聞き手が文脈情報にどの程度依存するかを、話し手は決めなければならない。発話形態の選択は発話をいかに特定のにするかというところに起こるのである。この際、たとえば(5)は(7)や(8)と同じ思考を伝達している。

(7) 今晚、日本は勝てるかな。

(8) 今晚の試合に日本チームは勝てるかな。

「試合」をサッカーの試合, 「チーム」をサッカーチーム, 「今晚」を発話時の数時間後と仮定することによって, 話し手の生み出す発話は(6)のような形式になろう。

もちろん, (5), (6), (7), (8)が同一の意味表示であるというわけではないにしても, 一つの文の意味的表示と伝達される思考間には組織的なつながりがあることは否定できない。文意味と発話解釈間のギャップの故に, 同一の思考の伝達のために複数の異なった文が可能となるのであるが, (6)のような特定化の進んでいる文においても, 話し手は異なった状況では異なった命題を表出しているのである。たとえば, 相手チームがどこの国なのか, 文脈情報として話し手は補充することがあるかもしれないのである。一連の例文(5)~(8)から, 話し手の提供する文脈情報が少ないほど, 聞き手の補充する文脈情報の割合は高くなり, したがって, 思考の明示性は低くなることがわかる。話し手の提供する文脈情報が少ないということは, 話し手が聞き手を助ける割合が低いということでもある。つまり, 関連性を求めての思考の同定作業において, 話し手がどの程度, 聞き手に手を差し伸べるのかということによって, 種々の発話形態が生まれるということである。

III

前のセクションで, 表意レベルでの発話形態のバリエーションをみた。次に, 表出される命題を聞き手が取り扱う段階で, その解釈の上に課せられる制約があること, その制約ゆえ発話形態が変わることを考察する。この際の話し手の課す制約に二種を区別する必要がある。一方は語用論的側面における制約であり, 他方は言語的要素による制約である。ここでは前者について考察し, 後者についてはIVで論じる。

IIにおいて, 文の意味的表示(論理形式)は完全な命題表示には程遠く, そこに至るには文脈情報を基に命題の復元という作業があることを論じた。しかし, 論理形式と命題との間には組織的なつながりが確かにある。これと反対に, 発話というのはその意味表示と関係のない思考を伝えようとするのがしばしばある。次の(9)の対話を考えてみよう。

(9) A: 私の, 今度出る本, 読んでくれる?

B：語用論だからね。

- (10) Aの本は語用論についての本である。
 (11) a. Bは語用論に興味がない。
 b. Bは語用論に興味がある。
 (12) a. Bはその本を読まないだろう。
 b. Bはその本を読むだろう。

(9) Bの聞き手のAの復元する解釈は、(10)の情報をまず取り入れた上で(11)のいずれの仮定を保持しているかに依っている。したがって、聞き手の復元する文脈仮定が話し手によって描かれた文脈と一致しないことは起こりうる。この場合は誤解ということが生じるということである。しかしながら、伝達が成功するのであれば、(9) Bの聞き手は自分がその解釈の際間違いのない仮定を選ぶのである。その原理は何であろうか。

この問いへの答えは、(13)のような直接的な返答の代わりに、(9) Bのように間接的に思考を伝達しようとしたのはなぜかということに答えることと同じである。

(13) いや、読むつもりはない。

(9) Bと(12)の(a), (b)いずれとの間にも言語的に特定されたつながりはないが、聞き手の解釈はその推論の過程で制限を受けることになる。すなわち、聞き手はBの発話から(11)のいずれかの仮定を取り込み、(12)のいずれかを結論として導出するよう方向づけられるわけである。これとは対照的に、(13)の直接返答に対して、その聞き手は何の制限も課せられず、どんな含意を導出してもよいのである。

発話の言語的特質は話し手の命題を十分に決定するとはいえず、文脈情報を基に構築していかなければならないということを前節でみた。この際、復元する命題の範囲が(理論上は行けるが)いかなる方向へでも行けるわけではなく、制約を課せられているということであった。間接的表現における、推意によって結論を導出する際にも同じことが言える。すなわち、聞き手は自分の呼び出しうる(accessible)信念や仮定によって、理論的にはどんな方向へも解釈可能でありうる。しかし、伝達が成功するという事実の示唆することは、当該の発話解釈に当たって聞き手の文脈仮定の選択は勝手気ままに行くものではなく、話し手によって制約を課せられているということである。聞き手にいろいろの命題の中か

らある一定の方向にある結論を選ばせる、その選んだものが話し手の意図したものということである。ではその中のどれなのであるか。最小の処理労力で適切な文脈効果を生じせしめるもの、言い換えれば関連性の原理に調和する解釈ということになる。

ある一定の方向の結論が(9)Bの発話のように一つということでないこともある。たとえば、

(14) A: 正夫: 君の車はベンツかい?

B: よし子: 私は高級車は運転しないわ。

よし子の返答の明示された内容としては、正夫の問いに直接的に答えていない。しかし(15)の文脈において処理されるとき、(14)Bは(16)を結論として導出する。

(15) ベンツは高級車である。

(16) よし子の車はベンツではない。

ここで(14)Bのよし子の発話は、(15)と(16)に示された推意だけではないであろう。たとえば、

(17) a. よし子はフェラーリも運転しない。

b. よし子はジャガーも運転しない。

c. よし子は高級車は嫌いだ。

d. よし子は高級車を乗り回す人が好きでない。

といったことも、その返答から推意として引き出されるかもしれない。

Sperber & Wilsonによれば、(14)Bの発話の特定の推意結論である(15)と(16)は強推意 (strong implicature), (17)にある一連の想定は弱推意 (weak implicature) と呼ばれる。次の(18)のBの発話には特定の推意は存在せず、弱推意群のみを伝える。

(18) (ゼミのクラスで)

A: 先生、今日は何をしますか。

B: 私、ひどい頭痛がするの。

(18)Bの話し手はこれという特定の仮定はもたず、聞き手がその発話から何等かの結論を導出するよう期待しているといえる。「何もしたくない、できるだけ早く終わりたい、少しでもやろう、必要なことだけやろう、何をするか決めていない」等々、異なった、しかし関連する結論である。

最善の関連性をめざしている話し手は、発話理解に必要な文脈仮定を

聞き手が即座に呼び出せると想定しているのである。聞き手が解釈の過程に持ちこむ文脈仮定について比較すると、(18)Bの聞き手のほうが(14)Bの聞き手より、選択の余地がはるかに多い。(14)Bおよび(9)Bの話し手は、聞き手がある特定の文脈仮定を呼び出し、特定の結論を導出することを予想している。一方、(18)Bの話し手は、聞き手を誘導してある種のタイプの文脈仮定を供給させ、それによってあるタイプの結論を導出させるのであって、特定のどの仮定、特定のどの結論かは問題としていない。(18)Bについて示したいくつかの仮定は、話し手の発話が示唆する可能な解釈の一つにすぎないし、他の解釈も可能である。と同時に、聞き手は文脈仮定の選択を、そしてそこから結論の導出を自由にできるわけでもない。また(13)については、話し手は発話の文脈をはっきりさせていない。言い換えれば、関連性は有するが、いかなる推意も伝達していないのである。

(13)ではなく、(9)Bのように間接的に答えるとき、話し手は聞き手に(11)のいずれかの文脈を呼び出し、(12)のいずれかを演繹するよう要請しているが、これは(13)の直接的返答の解釈にはない処理労力を要求する。関連性の原理によれば、発話が最善の関連性を有するのは、文脈効果を得る際、その発話が聞き手に正当化しない労力を課さない場合に限るのである。つまり、(9)Bの発話の聞き手がこの発話が関連性の原理と調和するという仮定を維持するのは、(9)Bが(13)では得られない効果を達成していると話し手が想定する場合であるからである。間接的返答の効果は、ある文脈を即座に呼び出し、正しい文脈含意を復元することができ、そのことによって聞き手の解釈に制限を加えるということである。したがって、(15)を正夫が知らなかったというような、文脈を即座に呼び出せない話し手が判断した場合、話し手はそれをわからせるよう明示的発話(たとえば「私の車はベンツじゃないわ」)をしたであろう。明示的にしなくても自分の発話が十分に関連性を有すると(9)Bのよし子は判断したのである。

IV

話し手が聞き手の解釈に制約を加えられる以上、発話形態の選択のほ

かに、その制約を明示的に指示することに専念している言語表現があってもよいだろう。このような表現の例として、談話連結語 (discourse connective) がある。これは処理労力を最小にするという点で、最善の関連性を求める聞き手の目的に沿うものである。すなわち、最小のコストで正しい文脈の選択を保証するものということである。

次の(19)の連結を考えてみよう。

(19) A：今日は金曜日だ。

B：今日一日がんばればいいのよ。

ここでAの発話の続きとして、Bの発話を解釈するための文脈を聞き手は即座に呼び出し可能である。しかし、Bの意図としてどこに関連性を置いているのかは明白というのではなかろう。談話連結語と呼ばれるものを発話のはじめに使用してみると、話し手の意図が明確になってくることがわかる。以下の(20)–(25)で少しずつ異なった解釈を受けることが認められよう。

(20) A：今日は金曜日だ。

B：だから/つまり、今日一日がんばればいいのよ。

(21) A：今日は金曜日だ。

B：とにかく、今日一日がんばればいいのよ/がんばらなくては。

(22) A：今日は金曜日だ。

B：まだ、今日一日がんばらなくては。

(23) A：今日は金曜日だ。

B：でも、今日一日がんばらなくては。

(24) A：今日は金曜日だ。

B：何ととっても、今日一日がんばればいいのよ。

(25) A：今日は金曜日だ。

B：さらに、今日一日がんばればいいのよ。

(20)Bは、(20)Aを言うことによって聞き手Aが証明しようとしていることであるということに関連性を有する。「だから/つまり」が導入する命題が(20)Aの文脈含意と一致し、その発話は結論として解釈される。次の(21)Bは、(21)Aの発話が適切でないことを示唆している。先行発話の文脈効果としては(20)Bの場合より弱いといえよう。さらに(22)Bと(23)Bはそれぞれの先行発話Aによって伝わる仮定を否認することになる。「休日に

なっていない」(22B)「今日が一番大変な日だ」(23B)といった仮定を伝える。このことが(19B)と同じ発話では不自然になり、否定的内容を含む表現となるのであろう³⁾。話し手の「まだ」や「でも」の使用が適切であるのは、聞き手 A が明日は休日だという含意の導出を認める文脈仮定を即座に呼び出したと、話し手 B が仮定しているからである。「まだ」と「でも」はまったく同じ制約を課すわけではないので、あらゆる文脈で完全に交換可能であるわけではない。

(26) A: 田中先生は今日いらしていますか。

B: a. いらしています。でも、お会いできませんよ。

b. いらしています。まだ、お会いできませんよ。

B の第一の発話から文脈含意として A が導出したと B が仮定する命題(すなわち, a. A は今日先生に会える, b. A はすぐ先生に会える)と、「でも/まだ」に導かれる命題とが矛盾することは共通している。

(24)と(25)は「何といても」と「さらに」が導入する命題が、それぞれの A の発話の意図された文脈効果をより明示的にすることによって、関連性を有すると考えられる。すなわち, (24)B も(25)B も A から導出された仮定(たとえば「明日は休日である」)の証拠を提供するということで、文脈効果を強化しているわけである。

話し手が最善の関連性をめざしたという聞き手側の仮定の下では、テキストの一部を成す発話が先行する発話(群)に何らかの形でつながっていると解釈するのは当然の成り行きである。たとえば, (27)の連結において、第二の発話は第一の発話の解釈が記述する事象の説明である、ということにつながっていると理解される。すなわち、第一の発話の提示により生じる問いに対する答えとしてつながっていると言えるのである。

(27) David cut his finger. The knife slipped. (Blakemore (1992), 135)
 (27)の第二の発話が第一の発話の記述する事象の説明となるのは(28)のような文脈仮定がある場合である。

(28) ナイフが滑るのを放っておくことは、ナイフの使い手のけがの原因となりうる。

言い換えると、特定の文脈仮定(前提条件)を補うことによって、聞き手はこの特定の連結を打ち立てることが可能なのである。

(20)B で今日一日頑張ればいいということは、今日が金曜日であるという事実によって証明され、「だから/つまり」を含む発話は結論を導出する。一方、(24)B ではそれは今日が金曜日であるとの主張の証拠として提出されている。いずれの場合も、聞き手は(29)のような前提条件を補うことによってはじめて両発話の特定の連結が達成される。

(29) 金曜日一日頑張れば、翌日は休日であるから、働かなくてよい。

さて、新しい情報が関連性を有しうるのには三つの場合があることを述べた(p. 29)。いずれの場合も新しい仮定の関連性を確立するには推論が必要であり、さらにその推論は当該の情報に関係づけられる文脈仮定に依存する。談話連結語が先行発話との間で達成する特定の関係とは推論による連結である。これら談話連結語の特徴は、これを含む発話の真理条件に貢献しないということである。しかし異なる解釈を有するのであるとすると、非言語的説明を受けることになる。(19)B の表出命題の関連性を確立するには、この命題を(29)の文脈仮定と組合せ、推論を行う。そして推論による命題表示の同定の際、言語的意味が一役買い、表示がどのように扱われるかを定めるのである。

その発話がテキストや談話の一部であろうとなかろうと、文脈効果を得られるものと聞き手は期待してよいのである。また、一部である場合も、常に先行発話の解釈により得られる文脈内で関連性を追求するわけでもない⁴⁾。しかし実際に聞き手が先行発話の解釈を受けてという文脈内で発話を解釈する場合、その発話は三方法のいずれかでテキストに連結することになる。言い換えると、談話連結語についても三方法のいずれかで、聞き手の解釈に影響を与えることになる。もっと的確にいうと、連結語を含む発話の解釈を制約するのである。上記の一連の発話 P, dc Q で、(20)B は P の文脈含意の導出を認める場合であり、(22)B と(23)B は P の既存の仮定を取り消す場合である。(24)B と(25)B は既にもっていた P の文脈含意を強化する場合である。(21)B は既存の仮定の強度を変えないので、影響を与えないということになる⁵⁾。談話連結語は命題表示には貢献しないが、命題表示の処理に関する指令を記号化しているものと解される。ある種の解釈に聞き手を向ける方法において関連性を有するのである⁶⁾。

V

話し手はあらゆる情報を言語化して伝達しようとはしないというところに、種々の発話形態が生まれることを考察してきた。聞き手が即座に呼び出せるであろう情報は言語化しない方がコストを下げる場合もあり、コストが上がってもより多くの効果を得る場合もある。言語化される（明示的に述べる）情報、されない（非明示的に残される）情報は効果と労力の観点から判断されていくわけである。この言語化されない情報は関連性理論では二種に分ける。一方は表意であり、それは文の論理形式の展開に基づくものであり、他方は、表意ではない被伝達仮定である推意と呼ばれるものである⁷⁾。話し手は伝達したい情報のどれを表意とし、どれを推意するのかの決定に加えて、聞き手の推意の同定をどれだけ制約（誘導）するかを決断をもすることをみてきた。

推意への制約となる言語表現の存在は、従来の言語の意味は真理条件的に分析できるという見解を崩すものであると同時に、Griceが提示した真理条件的対非真理条件的見解にも変更を促すものである。いまや問題は二つの区別に直面しているということになる。一方は、文の論理形式に文脈情報によって展開された内容（表意）と、文脈情報によって表出命題から導出される内容（推意）の区別であり、他方は、意味の表示的分析と、手続き的分析の区別である。表示的というのは命題表示の一部となるものであり、従来から意味論で扱われてきた。これの処理を指示するのが手続き的なものであり、非真理条件的である。

Griceは会話の推意によって、協調の原理とある種の公準に従って話をしているという仮定に基づいて、真理条件的意味論にとって問題と思われた現象（たとえば and や but）の、非言語的説明を可能にした。さらに、会話の諸原則を基に導出されるのではなく、言語的に記号化された推意として分析されるものがあることを示した。Griceによれば、soのような談話連結語は表示的であるが、真理条件的意味を有しない、つまり、非真理条件的意味であるが（命題表出に貢献しないが）、命題表示に貢献するというのである⁸⁾。もしGriceの分析が正しいならば、soに対する概念があるであろうが、談話連結語としてのsoには対応する概念はないと思われる⁹⁾。したがって表示的には分析できない意味をもつ表現と

いえるのである。表示がどう扱われるかを決めるために推論を行うということによってこれらの談話連結語の意味は手続き的であるということである¹⁰⁾。

どれだけの情報を、どのように供給することが関連性の原理と調和することであるのかの判断は、日常の言語使用、文芸作品での言語使用の区別なく、話し手（書き手）に求められるのである。この理論においては、発話形式の決定は、認知能力の一つとして、関連性の原理に調和すると言う目的のために、常に行われるものであり、決して美的装飾的なものでも、気分のものでもないのである¹¹⁾。

注

- 1) 聞き手の有している百科事典的知識が当該の発話について全て使われるわけではなく、ごく一部が呼び出される。最も呼び出しの容易なものは、最も近いときに処理されたもの、すなわち、直前の発話（およびそこから引き出される情報）である。
- 2) この三作業は論理形式を肉付けして発話の意味表示、すなわち表意とするものである。表意が Grice のいう *what is said* と本質的に異なるところは、ここでも述べているように完全な表意に至るには文脈情報が必要とされることである。(5)の意味表示は聞き手の復元するべき表意に関してごく粗い手がかりしか提供しないので、(6), (7), (8)と比べて表意へと展開する過程には、文脈情報が大いに関連する。また、発話によって伝えられる表意の同定は、単に真理値の判断のできる命題を得るという問題ではない。次の例をみよう (Carston (1988) 参照)。
 - (i) The park is some distance from my house.
 - (ii) The park is further from my house than you might think.
 発話の言語的内容と指示付与によって、(i)の聞き手は完全な命題を復元することができる。つまり、公園と家が隣接していないことを示すものであるが、これは聞き手が復元する命題ではない。ここでは、話し手は関連性を有しているという仮定に基づき、聞き手は文脈情報を利用して、さらに完全に特定の命題、すなわち(ii)のようなものを復元する。この作業も富化である。
- 3) 日本語では、第一の発話と第二の発話間の連結性が言語的に示されているといえるかもしれない。英語への翻訳と比べてほしい。
 - (i) It's Friday today. So, I have to work today.
 - (ii) It's Friday today. Still, I have to work today.
 あるいは、(27)の翻訳では「のだ」が必要であろう。
 - (iii) デビッドは指を切った。ナイフが滑ったのだ。
- 4) たとえば、次の例で B の反応は、ジェーンのした断定の報告とも、バスが近づいているという B 自身による断定であるとも解釈できる (Bla-

kemore (1992), 87)

(i) A: What did Jane say?

B: The bus is coming.

- 5) 既存の仮定に影響を与えない場合, その発話には関連性がないことになる。しかし, 強化の逆の弱化を認めるならば, この場合も何等かの関連性は有することになると考えられる。
- 6) 英語の *so*, *after all* などの談話連結語についての考察を日本語に応用したものである。Blakemore (1987, 1992) において議論されている。
- 7) Grice (1975) の推意 (つまり会話の含意と呼ばれてきたもの) より狭い概念といえる。Grice との比較, および Grice への批判に関しては Wilson & Sperber (1981) を参照されたし。
- 8) Grice は次の *therefore* の示唆的意味を言語的に記号化された推意であるとし, 慣習推意 (*conventional implicature*) と呼んだ。
- (i) a. He is an Englishman
b. He is, therefore, brave.
- (ia) は (ib) に表示されている事象の説明である。表出命題に貢献せず, 何等かの表示には貢献するというのである。この Grice の説明によれば, 話し手は (ia) が (ib) の説明であるということを送達していることになるが, *so* を含む発話が別の発話によって先行されない次の (iii) ではうまくいかない。
- (ii) a. David isn't here.
b. So Barbara is in town.
- (iii) So, you've spent all your money.
- 聞き手が両手いっぱいの荷物を抱えて帰ってきたのを見ながらの発話であるという場合, (iii) には説明として解釈しうる先行発話がないから, *so* の話し手は聞き手がお金を全部使ったことを説明しているとはいえない。(iv) の場合も *so* の表示的意味は何であるといえよいのであろうか。
- (iv) A: Your clothes smell of perfume.
B: So (what)?
- 対照的に, 関連性理論では, 両者の *so* の導入する発話は結論として解釈しうる。
- 9) He did *so*. などの *so* は「そうする」, 様態副詞の *so* には「そのように」という意味機能が対応すると主張できる。
- 10) I warn や I predict のような遂行発話はこれらを含む発話の真理条件に貢献しないが, 表示的に説明されるものである。表示的だが, 非真理条件的意味であるということである (Blakemore (1992), 第 6 章参照)。
- 11) 言語形式の決定には, 表出命題に対する話し手の態度——たとえば, 事象の事実の記述として関連性があるのか, 約束として, あるいは情報や行動を求める要請の記述として関連性があるのか——を確立することも関わる。話し手の態度がどの程度明示的であるかに応じて, 発話のスタイルが変わるということになる。これはまた別の論文となろう。

参照文献

- Blakemore, Diane (1987). *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- (1988). 'So' as a constraint on relevance. In Ruth Kempson (ed.), 183-195.
- (1992). *Understanding Utterances — An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell. (武内道子・山崎英一訳『ひとは発話をどう理解するのか —— 関連性理論入門』ひつじ書房, 1994.)
- Carston, Robyn (1988). Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics. In Ruth Kempson (ed.), 155-181.
- Grice, H.P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole and J. Morgan (eds.), *Speech Acts (Syntax and Semantics 3)*. New York: Academic Press, 41-58.
- Kempson, Ruth (ed.) (1988). *Mental representations: The interface between language and reality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 西山祐司 (1992) 「発話解釈と認知：関連性理論について」『認知科学ハンドブック』第2章。共立出版, 446-476。
- Sperber, D. and D. Wilson (1986). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Wilson, D. and D. Sperber (1981). On Grice's theory of conversation. In P. Werth (ed.), *Conversation and Discourse*. London: Croom Helm. 155-78.